

伊十六（イ16）潜水艦乗員で 特別攻撃隊作戦に参加して

印 南 春 治

中野一丁目

当艦には、昭和十四年九月三日艤装員として乗艦、呉海軍工廠にて翌年三月三〇日竣工した。開戦直前、南方洋上において長時間潜航並びに深々度潜航等特別訓練を終え、直ちに呉工廠にて後甲板を改造し、特殊潜航艇（特潜）を搭載する工事が急速に進められた。

（一）第一次特別攻撃隊真珠湾攻撃

特潜母艦となったイ16、イ18、イ20、イ22、イ24潜は、第一潜水隊先遣部隊として昭和十六年十一月十八日、瀬戸内海柱島亀ヶ首にて特潜を搭載、艇長横山正治中尉、艇付上田定二曹も乗艦した。真珠湾に出撃するにあたり、山田薫艦長（中佐）より対米英宣戦布告その他の訓示があり、我々は万歳をもって応えたのであった。夕闇の頃、静かに内海を走り太平洋に入った。十二月八日まで二〇日ばかりで真珠湾に直航する。昼間潜航、夜間のみ水上航行で近づく隠密航海である。電波も受信のみで発信出来ず、不用物の海中投棄も出来ない。太平洋の真ん中は非常に波が荒かった。

機関科、電機部の配置にあった私は、夜間洋上航行中特潜のバッテリーの充電及び艇内部の電池の手入れ、装置の検査のため上田搭乗員と特潜に乗り込んだ。太い麻ロープで母艦の司令塔から特潜に結ばれているが、大波が上甲板を洗い、腕の力だけで濡れネズミになりはいた上があった。「ハッチ」を開け艇内に入るのも両手を上げて胴体がやっと入れる位で「ラッタル」を下りた。内部は搭乗員二名の狭い座席がやつとで、機械器具が一杯に配置されていた。潜水艦内も狭いが、比べようもない位で驚いた。開戦までの短い日ではあるが、横山、上田搭乗員は艦長室の個室で静かに読書や習字に務め、精神統治に努めておられたご様子と伺った。

六日オワフ島の真珠湾に接近したが、入口の灯が点滅している。敵哨戒艇が入港して行ったことを知らされ、シメタノこれで敵の警戒も手薄であり、入口の防潜網も取り除かれている。特潜の奇襲進入が容易であることを知ったのである。

特潜から電話で、最後の別れの言葉があり、十二月七日二〇

時十二分特潜は離艦発進して行った。無事の成功を祈りつつ、搭乗員収容地点である、近くのラナイ島西方海面に向かい潜航待機。(特潜の発進とは、母艦(イ16)が特潜を後甲板に載せたまま潜航し、電話その他の連絡線を切断したあと、固定された二か所の「バンド」を母艦内の「ハンドル」操作により取り外し、特潜は自力で航行して行くこと)

翌八日の午前六時の攻撃を待つ夜は、一睡も出来なかった。早朝より戦闘配置につき間もなく、爆弾音、水中炸裂音などドカン、ドカンと響いてくる。そうしたなかで、本艦は特潜と確実な連絡があり、『トラトラ』われ奇襲に成功せり』の電報を受信、かすかに「航行不能」の特定符号を受信した以外に連絡がなかったが、これらの通信連絡などから、特潜が主力艦一隻を撃沈したものと判断した。

港内の爆弾音とは別に、湾外で爆雷音が聞こえはじめた。敵も我が方の所在を知り、攻撃に出て来たのである。次第に近くなる。ドカン、ズシン、と遠く近く爆雷音、そのたびに艦はミシミシ、クラクラと動く。敵の「ソーラー」器を逃れるために、音の出るものは全部停止して、深度百メートル位のところで浮遊の状態で静止していた。至近弾が連続的に響いてくる。深度をさらに深め百二〇メートル以上中に入ったように覚えている。

(安全潜航深度は百メートル「水圧十kg」)
今度は駄目か！次か！と、生唾を呑んで戦闘配置を守った。

至近弾により、後部電池室のバッテリーの外器(エボナイト製)が破損し、内部の電液(硫酸)が流出し、艦底の「ビルジ」(汚水)と混合し煙のようなガスを発生している。直ちに応急作業に取りかかり、破損の二、三器を一群百二〇器の中から除外し、艦の水中航行に支障のないよう努めた。

夕方迄連続的に攻撃が続き耳が変になった位で、相当多量の爆雷を搭載した艦のようであった。後日、同年兵の近藤(水雷科)に聞いたことだが、「仮装沈没」の作業を実施したとのこと。それは、攻撃によって沈没したことを敵に知らせるため、重油を多量に放出し、又上甲板にあらかじめ準備された木板等を艦内の操作により海上に浮上させる。これを見て撃沈したものと勘違いし、去っていった由。これも戦術の中に入るのかも知れない。収容地点には、ついに搭乗員の姿は発見出来なかった。最初から戻る意思がなかったか、又は湾口の防潜網で退路を断られたかは分からない。

待つこと四、五日にして帰途につき、途中南洋諸島のクゼリン島で小休止、翌年正月三日、横須賀に帰港した。

(二) 第二次特別攻撃隊作戦に従事

昭和十七年三月十九日、第八潜水戦隊に編入され特潜母艦千代田と播磨灘において、連合演習訓練を行い、印度洋作戦に先遣部隊(イ16、イ18、イ20潜)として、四月十六日呉発、二七日ペナン基地に着いた。母艦日進から特潜を搭載、三〇日出撃

した。印度洋のど真ん中も大きなうねりで、イ18潜は主機械故障を起こすなど難航を克服し、アフリカの東側マダガスカル島のデイゴスアレス港（英）に奇襲攻撃を敢行した。搭乗員岩瀬勝輔少尉、高田高三二曹、五月三十一日、二三時四〇分、湾口より約十哩の洋上より特潜を発進し、その後、艇員の収容地点で待機したが、連れの搭乗員も姿を現さなかった（イ20故障のため欠）。

攻撃により戦艦ラミリス大破、商船ブリテッシュ沈没せしめた。戦後の情報で、攻撃の数日後二名の日本人がデイゴスアレス島北方で英軍哨兵と交戦し、射殺された。特潜の乗員であることは所持品から間違いないが、イ16、イ18潜の連れの搭乗員かは不明である。

六月五日よりモザンビーク海峡において交通破壊戦を開始した（「アフリカ」と「デイゴスアレス」島の間）。

六月六日ユーゴスラビア船（スザク）三、八八九トン。撃沈。

六月七日ギリシャ船（アギオス）四、八四七トン。撃沈。

六月十二日ユーゴスラビア船（スペター）三、七四八トン。

撃沈。

七月一日スウェーデン船（イクナレン）五、二四三トン。撃沈。

商船隊は小型艦艇が護衛し、隊列を組んで航行しているが、まず艦艇を攻撃すると、商船は右往左往全速力で逃げ回る。我

が方は、数隻の潜水艦で攻撃を加える。時には「急速浮上砲戦用意」で砲撃を開始する。見張員の話によれば、火災を起こし、大きな黒煙を上げ、上甲板を船員が走り回り、幾隻かのボートを降ろし、白く見えるアフリカ海岸の方向に逃げて行ったという。

途中母船より燃料の補給を受け、マエ島、「デイゴガルシア」を偵察し、八月十四日ペナン基地に帰った。印度洋では、ドイツのUボートと行動を共にしたこともあり、小型ながら実に勇敢で、大きな商船を拿捕して来たことを知らされた。

ペナン基地を出てから約三か月半近く、昼間は潜行し、夜間のみ浮上し水上航行と、全く太陽を見ない生活、又潜水艦は真水が少なく、朝の洗面もままならず、艦内はムンムンと汗だらけの体を濡れた手拭で拭くのがやっつとである。それに潜航中の室内の空気が悪く、各室で酸素を放出しているが、息苦しく、乗員は肩で呼吸しているような状態であった。夜間浮上し司令塔より大気が流入すると、乗組員はその下で酸素の多い空気をうまそうに一杯吸い込む。ちょうど水にありついた魚のようである。食事も生ものは一週間足らずでなくなり、缶詰ご飯ばかり。ペナンに帰港して久しぶりに上甲板に上り、太陽がまぶしく驚いた。

八月末、横須賀に帰り、船の整備を終えて出撃し、トラック島よりショートランドにおいて千代田から特潜を搭載、ルンガ

泊地攻撃に編入された。

(三) 第三次特攻作戦十一月十一日未明エスペランス岬北西海面から搭乗員八巻悌二中佐、橋本亮一上曹を發進したが、事故により操縦不能となり自沈す

第四次特潜攻撃は、同月二七日ガダルカナル島沖にて搭乗員外弘志中尉、井熊新作二曹を發進。同艇よりの消息は不明だったが、在ガダルカナル島陸軍は大型船の撃沈を視認したと報じてきた。

十二月二日トラック島着、特潜搭載し、十二月十三日第五次特潜攻撃。門義視中尉、矢萩利夫二曹が搭乗し、發進したが、敵艦に命中せず自沈した。

十七年十二月中頃より翌年三月末日まで、「トラック」を基地としてショートランドを経てガダルカナル島作戦で散開配備につき、偵察により敵の動きを通報、ガダルカナル島に物資を繰り返し輸送し、苦闘した。

真珠湾から洋上戦鬪に至る特潜の五次にわたる特攻作戦も、戦局の移り変わりと共に潜水艦も変化せざるを得なくなつた。昼間は姿を隠し、夜間、敵陣で浮上奇襲する特技も電波探知機の發達により不可能となつた。

十八年二月二日、南東方面部隊に編入され「ラポール」を基地として、ニューギニアの友軍に物資を輸送する任務であつた。

四月一日、「ラエ」輸送には兵器、彈藥、食糧、ドラム缶(二本)、人員を揚陸させ、帰途は病身者をラポール迄移送した。十二月末までライ、ブナ、シオに数回輸送したが、制空権のない戦場では唯一の頼りかも知れない。私達は別名マルツと称していた。

特潜を搭載していた甲板に、ゴム袋に詰められた物資が一杯積み重ねられ、ネットとワイヤで結ばれている。暗夜浮上し、友軍の「ダイハツ」に引き渡すのであるが、その作業が実に忙しい。船内にある物資を、前後部のハッチから手送り引き上げる。「ダイハツ」に積み込み、出来るだけ短時間で終了し、再び潜航して身を隠す。

敵哨戒機が飛来し、照明弾を落下し、爆彈攻撃をしてくる。そのうちに魚雷艇をもって機銃掃射をかけてくる。艦の安全を囿り、急速潜航をして海中に身を隠してしまふ。

十二月二五日、被爆損傷し、翌十九年一月二日、修理のため横須賀に帰港し、十二日に戦友と別れを惜しみつつイ16潜を退艦した。

横鎮(横須賀鎮守府)付となり、その後大湊おおみなと潜水艦基地隊分隊長、大竹海軍潜水学校の分隊長となり、終戦を迎えた。

退艦後イ16潜は、二月二六日横須賀發、配備につき、五月十四日ブイン輸送後消息不明。米側資料によると、ブイン北東海面(五月十九日)で米駆逐艦イングラッドが「ソーナー」探知

し、ヘッジホッグ攻撃五回で命中音二回、その後深海大爆発したと報じている。イ16潜艦装束当時から乗組員の大多数が、そして生死を共にしたあの顔この顔が、南方の海深く沈んでいったのだ。私が生き残り者の中で最後に退艦した者かも知れない。

イ16潜水艦要目は次の通り(参考)

全長	一〇九・三メートル
幅	九・一メートル
排水量	三、五六一トン
水上速度	三三・六ノット
水中速度	八ノット
安全潜航深度	一〇〇メートル
定員	九五名
機銃(二・五mm二連)	一座
砲(十四cm)	一門
発車管(首)	八門
魚雷(五三cm)	二〇個

